

8月の定期健診で、腹部に炎症がみつかり、悪性リンパ腫と診断され、消化器内科の主治医から「ドクターストップ」を受けました。早期発見となったことを、心より感謝しています。腫瘍内科に転科し、主治医、担当医が「完治を目指すか、高齢者には厳しい治療となります」と言われ、治療が始まりました。そのとおりに、副作用、感染症に苦しみ、3週間のサイクルにはついていけず、2倍も時間がかかってしまいました。



夫は夏に入院し、2か月以上もあっという間に過ぎました。留守を守るエルミタージュもすっかり秋めいてきました。先週の終わり頃には夫は担当医から、「副作用の症状に問題がなければ、一時退院の可能性もあります」という話を聞いていました。私たちはとても喜びました。私は自宅のお掃除などを丁寧にして、準備していました。

適切な処置と親切な看護を受けて、体力も回復して、3週間遅れで、2回目の抗がん剤投与を4回受けました。体調もよさそうだし、一時退院の希望もあり、頑張ろう！という気持ちで、最後の点滴を受ける日を迎えました。当日、抗がん剤の副作用予防の点滴を受けながら、私から前日の礼拝、教会の皆様のことについて聞いている最中、急激な悪寒に襲われ、ガタガタ震えがきて、高熱になってしまいました。一時的に意識も薄れました。目の前で倒れられては、私も動転してしまいます。抗がん剤は中止となり、副作用の対処に追われました。



血液検査によれば、発熱の原因は白血球数が激減して、今度は緑膿菌による感染症になったとのことでした。抗菌剤、抗生剤、リンゲル剤など、再び点滴につながれてしまいました。熱のため全体的に体力を奪われますが、突然の急変で、気力も失いそうな気分だったと思います。担当医は腫瘍マーカーとなるLDHの数値は基準値内にあるので、問題はないとのことでした。けれども抗がん剤により、血液は非常にダメージを受け、赤血球の輸血、血小板の輸血が必要な状態になると言われました。

腫瘍の傷から少量の出血があり、下血しているのも、辛い症状です。担当医は治癒の過程でよくあることだから、時間を待ちましょうと言われます。前から食欲がありませんが、これは抗がん剤により味覚異常になったのではないかと想像しますが、これも苦しいもののようです。

私がそばにいても回復のためには何も力がありません。また、遅くならないうちに帰宅しなければなりません。高熱の夫を病院にお願いして、足取りも重くなりながら、残念な気持ちに押しつぶされそうになりながら、帰宅しました。前日の礼拝後にわざわざ報告の時間をいただいて、「一時的に退院の可能性もあるとのこと」と申し上げて、私はもとより、多くの方々に喜んで頂いたのも、「羨喜び」に終わってしまいました。一進一退の道となりました。

人間の身体は本当に精巧に、組み合って、機能しているのだということを改めて感じます。血液は特に全身を巡っていますから、抗がん剤により破壊されると、全身的に影響を及ぼすのでしょう。その苦しみを私は実感することが出来ず、ただ可哀そうにと胸を痛めるばかりです。夫は熱が引くと、「安静にいなさい」との指示を聞いているはずなのに、起き上がって、パソコンを打ち出し始めます。「体力を消耗してしまいます」と言っても、夢中になっている間は聞く耳なし。でも今回は少し無理だと感じ始めたようです。「少し眠ろう」と言ってくれました。2度目の感染症にも、なんとか打ち勝って、回復へ向かわせてくださいと心から祈っています。